

日時 : 2011年9月25日 13:30開始

場所 : 大阪市 池辺陽設計の最小限住宅 NO.32

発言者 : 伊藤 喜久

川島 智生(司会)

菅 正太郎

菅 : 伊藤喜久さんの紹介。

概要説明 : 実際の監理は西澤文隆氏が手掛ける。

独身時代に設計依頼。伊藤貞亮さんにご結婚する前に。

川島 : 伊藤貞亮さんが亡くなられて今年で十年。芸術家肌、工作少年であった。父である伊藤為吉は渡米するなどして独学で建築を学んだ。藤森照信の先生にあたる、村松貞次郎は、伊藤為吉の伝記を岩波書店から出版している。交響楽団を結成するなど、芸術家筋であった。そんな話を伺っているときに、「池辺さんに昔設計を頼んだんだ」という話がでてきた。非常に驚いた記憶がある。

その後、この建築は中谷礼仁氏や千葉工大の山崎鯛介氏などの東京の人から注目を集めていた。なぜなら、池辺さんの立体最小限住宅は東京には全く残っていないから。特に、この建物ができた昭和30年以降は木造による試みが減ってきた。ほとんどがRC造やS造に変わっていった。木造で最後の時期にあたる。また、その後も木造で作ったとしても、総2階建であり、片流れでロフトがあるものは全部で7つしかない。東京にあるはずの残りの6件はもう残っていないらしい。ただこの立体最小限住宅に、戦後間もない頃の建築家が考えいたこと、その精神が詰まっていると考えている。確認申請等の図面が残っていることも珍しい。大阪の坂倉事務所が深く関わっている。施工は日本電建が請け負った。

伊藤 : 丁度、建築中に池辺さんの自邸に一度伺ったことがある。

川島 : 自邸とのNO.32類似点はセットバックを上手く使っている点。ただ最近では池辺さんを知らない人も多い。

弟子である原広司の建築がなぜあの形であるかは、池辺さんに起源がある。

工事の費用について。当時の大卒の初任給が1万円。建物全体の工事費が45万円。普通の終戦直後の家はもっと安かったはず。

伊藤 : 現在の天井は貼ってあるはず。硝子も当時もままである。

川島 : 池辺さんの住宅は狭い、という事で現在では建て替えられてしまう。だから、残

らなかった。そういう意味で貴重である。

川島：階段の手摺もオリジナル。

菅： 天井は斜板張りとは図面にある。おそらく外にある斜板が室内にも施されていたはず。壁は基本はハードボードであった。2階の床はホモゲンホルツ（パーティクルボード）であったようだ。1階の床はコンクリートブロック。屋根はアルミ板張り（アルミロール板のはげ葺）。

伊藤：最初はアルミ。ただ、台風のとくに浮いた。今とは違い、鉛釘を使用していたが。当時のこだわりがあった。あと設計においては、75cm モジュールが目玉だった。

伊藤：坂倉事務所の仲間に入れて頂いたような感じでした。

川島：当時は、クライアントも業者もごちゃごちゃで誰が所員かわからなかったような。事務所で図面を書いていると、隣から材料屋さんが口出しをしてきたり。

伊藤：音楽、建築、美術。どこかで全部繋がっている。

伊藤：（この家にして困ったことは？）屋根がアルミであるからか、雨の音がすごい。雨が降ったらすぐわかる。作りとしては、防水シートだけ。

菅： 断熱材も入っていないみたいだ。

伊藤：本来、余裕があったら天井は貼るはずだった。

夏は特に暑かったかは、よく覚えていない。

（この家を見た人の反応は？）音楽教室の生徒など子供たちは関心を持っていた。ただ大人は特に関心を示さなかった。音の響きは良かったかもしれない。

川島：関西交響楽団について。

伊藤：自身は所属していなかった。夫の貞亮は入っていた。朝比奈隆さんの政治力の影響が大きかった。

（貞亮の建築仲間については？）仲間はいたが、事務所へ来るのでこの建物に直接来ることはなかった。

菅： 当時のアバンギャルドであるから、当時の建築家から評価されたかどうかはわからない。

伊藤：（今後の有り様については？）私の一存では決められないが。資料室として活用したり。今までいろいろな使い方をしてきたが、初期の目的（自分用の一人住ま

い) は完成後2、3年で終了している。その後は離れと仕事場として活用した。水周りを西澤文隆先生は復元したいとおしゃっていた。水回りを復元した上で、保存できるといいかもしれない。

(当時の住まいのありようは?) 例えば、仕事から帰ったらシャワーを使用していた。

スバルN360が発売されてからは、それを足として通った。母親がいる時はこのキッチンを使った。寸法が少し高く、姉は「靴履きで丁度いい高さやね」と言っていた。

伊藤：便所は元々は汲取だったが、途中から水洗便所になった。住んでいないうちに北側が腐ってしまった。手入れもそんなにしていなかった。外壁のペンキを塗ったのは、20年くらい前。

欄間の上の窓は、今ははめ殺しの窓だが、元は内転びの回転窓のつもりだった。ただ、回転窓では網戸を取り付けることが難しそうだった。そこで、その変更は建設工事中に西澤先生に私から伝えた。今思えば失敗した事は、排気が2階へ上がること。というのも、今ではもうないが、当時はガス冷蔵庫をガス会社が販売していた。浅はかにも、排気のことを考えずにそれを使ってしまった。

川島：坂倉事務所の所員さんは毎日現場にいたのか。

伊藤：毎日もいてない。週に1度くらい。西澤文隆先生も月に1、2度は来ていたと思う。肝心な時は来ていた。栗石の付き方が悪い、と電話するとすぐに駆け付けてくれていた。私自身の仕事は夕方からなので、昼間は大工さんの作業を見ていた。コンクリートは現場で作っていた。

川島：地鎮祭は？

伊藤：棟上げはしたが、地鎮祭はしていない。西澤先生から、「仕事をする人は上棟式を楽しみにしているから、それはやった方がいいですよ」と言われた。

川島：見学者はいたのか？東京だと雑誌に発表もしていたが。

伊藤：全くいなかった。大阪であり、奥地で人の目にも触れないからだと思う。

池辺さんが来られたのは、はっきりと覚えているのは、工事前と竣工後の2回。もしかしたら工事期間中に山口に行く途中に寄ったことがあったかもしれないが。竣工後はご家族と一緒に来られた。池辺夫妻と奥さんの弟夫妻と写真家を連れて来た。

菅：設計の打ち合わせ時に何か要望はありましたか？

伊藤：池辺先生との打ち合わせはスムーズに進んだ。池辺先生にお任せした部分が多か

った。動線にはこだわっていたようだ。

川島：ディテールは他の作品とそんなに大差ない。興味があったのは構成の方だろう。

伊藤：キッチンが東京で作ったものを貨物列車で運んだ。ただ残念ながら、もうそのキッチンは残っていない。時間をかけて少しずつ、ご質問に答えながら当時の記憶を思い出している。